遠い異郷にいたような気が

五月二七日。深夜. 僕は今、雲南省大理（ターリー）下関（シャーカン）のホテルの一室にいる. 部屋の黄色い明かりに押し包まれて、ひとりポツンとベッドの縁に腰を下ろしている。外は夜。そして夜の下界、歩道の方からは、宴の終わりを惜しむかのような青空カラオケの歌声と家路につく人々のざわめきが伝わってくる。

部屋ごとポッカリと異郷の夜に浮かんでいるという気が、僕はする。街路のざわめきは近く、またはるか。黄色い明かりに押し包まれたカプセル。

雲南省、大理。省都、昆明から西へ四〇〇キロ。ミャンマー国境までは一五〇キロ。バスで一二時間弱の旅路の果てにたどり着いたこの街の夜にいて、僕はひとりカプセルのような部屋ごと浮かぶ。部屋の黄色い明かりに押し包まれて、遠い異郷の夜のまにまに、漂い、漂っていく。

大理を目指したのは、そこが果てだと納得できそうに思われたからだ。いや果てというよりも雲南という地方を納得できるような気がしたのだ。雲南、シルクロード、チベット、と中国には旅のメインテーマになる場所がいくつかある. しかし中国四〇〇〇年の歴史が旅の目的ではないように、魅力的な異郷のイメージというものもまたそれ自体としては旅の目的ではない。いつかテレビや雑誌で見たことのあるイメージを目の前にして、感動をなぞりなおすということになんらかの意味があるわけではない。ただひたすらに漂っていくのだ。漂って漂って、唐突に異郷に出会すこともあるし、またなんらかの納得によってきびすを返すこともある。納得は国境や地理、あるいは時間的な都合によっても生まれるだろう。しかしそれは本質的なことではないような気がする。ある街に到着し、その街を出発するとき、僕たちはつねにきびすを返し、果てを背後にするのだ。もちろん上海と雲南の大理という街とでは日本にいて触れられる情報の差もあるし、上海にはまた来ることもあるだろうが、大理には二度と来られないかもしれないという意味での違いはあるかもしれない。だが今この瞬間の僕が立ち寄り、立ち去る街としては何の違いもない。それはつねにこの瞬間の果てなのだ。異郷の落し穴というのはこの点にあるかもしれない。異郷そのものが果てを生むのでも目的として必要十分なものでもないのだ。

だが、僕のこの感想は旅の後半に取っておいた方がよさそうだ。今は深夜。雲南省大理市下関のホテルの一室での、この夜の孤独な浮遊感とでもいったものをまずは伝えることから始めよう。

※

昆湖飯店をチェックアウトしたのは今朝八時半項。バスに乗って火車站へ。出発の九時にはしばらく時間があったので、駅前の食堂で朝食に米線。車掌の指示に従って、駅前広場の一角にあった售票処でチケットを購入し（三八元）、出発を待った。バスは予想どおり満具になるまで粘り、約三〇分遅れで出発した。

昆明を出発したバスはすぐにどこまでもつづく田舎道に突入する。車線のない山道を登り、下り、あるいは突然のように開けた田園風景の中を走る。バスのエンジン音の響きにもたれるようにして、僕は眠り、また目覚めては田舎の風景を眺めた。それはどこまでも水平に開けた江南地方の田園風景よりも、山並とともにある日本の田園風景に近いように思われた。

田舎道とはいえ、昆明から大理、さらにその先の街を結ぶ道路は、鉄道のない雲南省西部にあっては人と物資を運ぶ幹線道路路なのだ。道路を走る車両の半数以上はトラック。重い荷を積んで坂道にあえぐトラックにじゃまされて、バスはスピードを上げることができない。それでもバスの運転者は慣れたように対向車を避けながら、トラックを追い越していく。

バスは昼過ぎに小さな食堂兼商店の前で停車して小休止。乗客のある者は食堂に入っていったが、多くの者は昼食を食べるという風でもなく、商店で軽食などを物色して休憩していた。僕も商店で昼食代わりにカステラのようなものとジュースを買って、ぼんやりと風景を眺めた。薄曇りの空の下にはまばらな緑を貼り付かせた山並が横たわっていた。山並の手前は田植えをすませたばかりの田圃が広がっていた。所々には、田植え前の茶色い田圃。視界の脇にひっそりと立ちつくす電柱。そして視界を横切る電線。

再びバスは山地の田舎道を走っていく。途中何回かのトイレ休憩をはさんで、バスはひたすら走り続け、夕刻にはかなり大きな峠を越えた。おそらくそのあたりから大理白族自治州に入っていったのだろう。所々の田圃では田植えの姿が見られた。遠目に見ても、見慣れない白い民族衣裳に身を包んだ女たちの田植えの姿。もちろん手植えだ。そして牛を扱う農夫の姿。あるいはたまには荷を運ぶろばの姿が見られた。山並の頂上近くまで開墾された田圃。

やがて日もとっぷりと暮れて、暗闇の中をバスは走り続けた。昼間でも見知らぬ土地は不安なものだけれども、視界が夜に閉ざされると不安はいっそう募ってくる。自分がある風景の中に確実に存在するという感覚

が失われて、あたかも闇の中に浮遊するかのように感じられるのだ。しかしバスは『下関、大理』行き。黙っていても終点で降りれば問題はない。
　そのうちにわかに賑やかな街中にバスは到着した。乏しいけれども都会の明かりの中をバスは進み、カラオケの歌声や人々のざわめきの立ちこめる中心地にバスは停車した。僕は思う。ここは下関、だとすると次の停車地が大理なのだ、と。そのように納得しながら見ていると、乗客はぞろぞろとバスを降りていく。ついには乗客は僕ひとり。下関は大きな街で、大理まで行く人は少ないのだ、と考えながら出発を待っていると、車掌が何事か声をかける。
「僕は大理まで行きます」
　と答えると、車掌は
「ここが大理だ．あそこのホテルに行きな」
　と言いながら、降りるようにというしぐさをする。
　僕は漠然と大理というのはもっとひっそりとした田舎の街だと考えていたので、どうにも納得できないままバスを降りた。僕の先入観が間違っていたのか、と。
　ともかく午後九時過ぎ。ホテルを捜さなければならないのだけれども、大理のホテルとしては『第二招待所』というのがガイドブックに紹介してあったのでそこへ行ってみようと考えた。しかしそうは考えても今自分のいる場所が分からないので、たまたま通りかかったリキシャの男に、
「第二招待所を知っているか」
　と尋ねると、男はしばらく考えて、やがて思いついたらしく、乗るようにというしぐさをする。
　リキシャは通りをどんどん進み、中心地を離れ、人気のない暗い街はずれに止まった。自転車を降りて、男が指差した方向を見ると、たしかに『第二招待所』の小さな看板が出ている。
「たぶんこのあたりだ」
　と言う男の言葉になんとなく納得してリキシャを降りた。
　薄暗い街角にひとり取り残されて、仕方なく男の指し示した方向に歩き始めた。しかし街灯もない道は暗く、しばらく歩いてもそれらしい建物はない。たまたま暗い道路に明かりを放っていた商店があったので、そこで『第二招待所』の場所を尋ねたのだけれども、商店の人も知らないらしくてかぶりを振るばかり。
「たぶんあっちの方じゃないかしらねぇ」
　と言いながら指差すのは、今僕が歩いてきた方向だった。
　仕方なく大通りに戻って、中心地の方へと歩き出した。大通りには都会らしい大きな建物が並んでいるのだけれども、人通りも少なくひっそり

としていて、僕は少し焦る。「ここはいったいどこなのだ！」と。確かにガイドブックで仕入れた大理の街の様子とはまったく違うのだ。

いささか混乱しながら、しばらく歩いていくと交通飯店というホテルがあった。休みがてらロビーに入って、服務員のひとりに尋ねた。

「大理賓館（大理一のホテル）はどこですか？」と。

笑いながら服務員は言葉を投げ返した。

「大理賓館は大理だ！　ここは下関だ」と。

何がどうなっているのか理解できなかったけれども、ただひとつ分かったことは、ここは下関という街だということだ。あわててガイドブックを調べて、下関の宿として紹介されている南招賓館というホテルを捜すことにした。結局昆明からのバスを降りた付近まで戻って、南招賓館にチェックイン。安い部屋は没有。八〇元と九〇元のツインならば空いているということだったので、八〇元の部屋にした。（このホテルの料金は外国人料金で、中国人の一・五倍だった。ホテルの料金に外国人料金という格差があるのは初めての経験だった。）

フロントの脇に、大理一日游のポスターが出ていたので、明日の分の予約を取った。こちらの方は中国人と同じ料金で四八元（人民幣）。（ツアーを利用することは本意ではなかったのだけれども、あまり時間がなかったので効率良くまわりたかったのだ。それに自分がいる場所が分からなくて混乱してしまったので、自信がなくなっていたのかもしれない。）

いったん部屋に入ったあと、腹が減っていたので近くの食堂へ。午後十時過ぎ．さすがに繁華街の賑わいも寂しくなり、店仕舞をしかけていた食堂に飛び込んで、せいろに五、六個の小肉まんと米線を食べた。帰りに大理啤酒と春城（煙草）を買い込んだ。

ホテルのフロントで手に入れた地図を調べて、ようやく僕は納得する。大理というのは白族自治州の名前であるとともに、その州郡としての大理市というのはいわゆる下関のこと。大理古城のある大理の街は大理市の北方十数キロのところにある。『下関、大理』行きのバスが下関（大理市）に着いたのももっともだし、交通飯店の服務員が「ここは下関だ。大理賓館は大理だ」と答えたのももっともなことだ。

ようやくそのようにして、僕は自分が今いる場所というものを納得したのだけれども、突然見知らぬ街に放り出されたかのような孤独感、浮遊感といったものはなかなか去らないのだった。

地図を失うということ、それはとても恐ろしいことだ。何も紙の地図や地図帳のことだけを言っているわけではない。身体に刻み込まれた地図と、その中に自らが占める位置のことだ。またそれはおそらく地理のこと

だけではなく、僕たちは知らず知らずのうちに身体的に刻み込まれた様々な次元の地図（社会的な関係）と自らの位置を納得している。僕たちが「私」と名付けるのは、おそらくそのような多くの次元から析出された位置のことなのだ。もしもすべての地図が通用しない、例えば暗闇の宇宙に放り出されたとしたら、自らの位置を確認する一切の手立てが失われたとしたら、そのとき「私」というものはおそらく存在しえない。あるいは僕たちが普通に「私」と呼ぶものとはまったく異なった存在になることだろう。

旅をするということ、それは旅人という位置に自らを置くことだ。それは日常の位置とは異なる位置であって、位置そのものの不在ではない。だからこそ旅もまた安定して存在しうるのだ。位置そのものを僕たちは消去することはできない。位置を離れた個は存在しえないのだ。しかしそうは言っても、位置というものは絶対ではない。それはある意味では幻想的なものだし、崩れるときにはいとも速やかに崩れ去るのだ。

旅人という位置は日常の位置とは少し異なる。それは位置ならぬ位置、位置をつねに離れようとする意志を伴った位置なのかもしれない。もちろん旅もまた日常になる。あらゆる行いが日常になり、骨化することは避けがたい。むしろそれは不可避なのだ。そのときただ一点旅が自らを旅と名付けうる根拠は地理の移動、地図上の位置の移動、そのような次元での位置との離別だろう。そしておそらく地理上の離別はあらゆる次元での離別をはらむのだ。

久しぶりの個室でバスにもつかり、夜も更けて到着した街で自らの位置も定かならぬまま、見知らぬ街のホテルの一室で、僕は大理啤酒の酔いに運ばれていく。

ここは大理。ここは雲南。ここはミャンマー国境から一五〇キロの…。ひとつひとつ確かめながら、僕はそのような地理的な位置の納得にはなんら意味はないのではないかと、ふと思う。

※

翌日は午前八時半に荷物を預けて南招賓館をチェックアウト。ホテルのロビーで待っていると、白族の白い民族衣裳に身を包んだ若い女性が迎えに来た。白族の晴れ着ともいうべき美しい衣裳で、思わず見とれてしまうのだけれども、その衣裳は確かにここへ来る途中田植えをしていた女たちの衣裳と同じものだ。彼女の導きで大型バスに乗り込んで、洱海の湖岸へ。

洱海は大理白族自治州の中心に位置し、南北に細長い（三〇キロほど）

文字通り耳のような形をした湖だ。下関（大理市）は洱海の南端に位置し、大理古城は西南岸に位置する。

大型バス二台分の観光客を乗せた観光船はしばらくすると曇り空の下に静かに波打つ洱海へと出航した。観光船の内部には食堂やラウンジなども備えてあったが、乗客たちの多くはデッキに出て、気持ちの良い風に吹かれていた。

船は一五分ほどで洱海公園到着。特に何ということもない公園なのだけれども、洱海に面した公園は石段をずっと登っていくようになっていて、高台から眺める洱海の景色はとても美しい。一時間ほど公園でゆっくりしたあと、再び船に乗って三〇分ほどで天境閣到着。

天境閣は洱海南東岸に突き出した岬に建てられた古い寺院のような閣で、その由来は分からないけれどもいかにも年月に風化した外観は尊い印象を与える。青い民族服に身を包んだ閣守のおばあさんたちが僕たちを出迎え、案内してくれた。朝から曇り空で肌寒かった天気も少しずつ晴れて、日差しが暖かかった。

船は洱海の東岸付近を進んでいった。船内のラウンジでは白族の民族音楽と踊りの出し物が披露されていた。ラウンジから流れてくる白族の歌や客たちの拍手を聞きながら、僕はデッキで洱海東岸の風景を眺めていた。薄曇りの空は白く輝き、薄い緑の衣をまとった石灰質の山並がその下に横たわっていた。山肌の一部は削り取られて石灰質の白みがかった山肌をさらしていた。ときおり山を崩すハッパの爆発音がとどろく。おそらく山を崩して石灰岩の採集をしているのだろう。人気のない風景の中にときおりとどろくハッパの響きが何か不思議なことのように思われた。小さな木造の運搬船が静かに視界を過ぎっていった。

昼近くに洱海中東岸近くに浮かぶ小島に建てられた小普陀に到着した。小普陀も由来は分からないが古い小さな寺院で、船を降りて閣へと向かう小道沿いには地元の人たちがざるに一杯のエビや干し魚や果物などを並べて観光客を待ち受けていた。特に干しエビは観光客の気に入ったようでまたたく間にざる一杯の干しエビは空になった。

小普陀の見学のあとは昼食。船内の食堂で食券と交換に一律の定食を受け取る。おかず一皿（四品ほど）と米飯、それに汁。汁は大きな寸胴に入れて置いてあるものを名々が勝手に容器によそう。座席に座りきれないで、デッキに座り込んで食べる者、ごはんに汁とおかずをぶっかけて食べる者、喋りながら食べる者、食べながら汁のおかわりに立ち上がる者、そして食べおわったあとの汁と食べ残しにまみれたテーブル。とても優雅な観光客の食事風景とは思われない雑然とした食事だったけれども、朝飯を食べていなかったこともあってとてもおいしかった。

昼食のあともデッキに座り込んで飽きることなく洱海の景色を眺めた。湖水は微かに波打ち、雲間から差しかける日差しに弾いていた。はるかな山並は青く淡く、遠くの雲間に溶け入っている。僕は何もすることがなく、ただいつまでも飽きることのない風景に見入っていた。

やがて船は洱海北西岸に接岸。船を降りるといっせいに白族の女性たちが群がってくる。売り物は金属やプラスチック製の指輪や腕輪や首飾りなど。めぼしい品はないので無視していると、最初一〇元で一品だったものが二品になり三品になった。どうしても無視しきれなくなって、飾りの付いた金属製の箸を買ってしまった。最初二五元だったものが一〇元だと食い下がってくるし、ちょうど観光バスも到著してあわてて売り子のおばさんを振り切るつもりで。

バスにしばらく乗って、蝴蝶泉へ。蝴蝶泉そのものは何ということもない泉なのだけれども、そこに至るまでの参道にはずらっと白族のお土産物屋が店を出していた。白い大きな竹傘の下の売り台には様々なアクセサリーや大理石の灰皿や花瓶、藍染めのTシャツや服、バッグなど。まるで泉の見学かお土産物屋の見学か分からないような印象なのだ。蝴蝶泉の背後にはなだらかな禿げ山が茶色い山肌をさらしながらそびえていた。

蝴蝶泉から三〇分ほどバスに揺られて三塔寺へ。三塔寺は大理古城付近にそびえる三本の白い塔から成り、大理といえば三塔寺というほど有名なのだ。その建造は南招国の晩期、九世紀だといわれている。三塔寺の境内には例の如くお土産物屋が並んでいる。お土産物屋をひやかしながら塔のまわりをぐるっとひとまわり。塔そのものには入れないので、境内の売店でココナツジュースを飲みながらひと休み。突然、観光客の女性と白族の売り子とのあいだで口喧嘩が始まった。おそらく物の値段か品質のことで言い合いになったのだろうが、しばらくして言い合いは治まったかに見えた。と、そのとき観光客の女性は憤然として売り台をひっくりかえしたかと思うと、悠然と立ち去ろうとする。頭に来た売り子たちは、それまで中立を守っていた売り子たちも含めてその観光客に襲いかかり、袋叩きにした。ちょっと甘口のココナツジュースを飲みながら、なんとも激しい人たちだと僕は目を丸くしたのだった。

三塔寺のあと、大理古城と博物館の見学．そもそも昨夜昆明からのバスで到着する予定だった大理古城は小さな城壁に囲われた小さな街で、いかにも古都という印象だった。観光ツアーで通り過ぎるだけでは惜しいので、ツアーのあとでここに戻って、今夜はここに泊まろうと決めたのだった。

ツアーはさらに観音塘というお寺をまわり、夕方五時前に南招賓館前に到着。雨が降り始めていた。ホテルに預けてあった荷物を受け出してし

ばらく雨宿りをしたあと、ホテル付近のバス停から大理行きのミニバスに乗り込んだ。

ミニバスは二〇分ほどで、大理古城到着。しばらく降っていた雨はすでに上がっていた。さっきツアーの人たちと歩いた大理博物館の前にバスターミナルがあり售票処があったので、明日の夜行バス昆明行きを予約した。料金は七二元。何故こんなに高いかというと臥輔なのだ。夜行バスで眠れないと次の日がしんどいし、寝台のバスというのは経験がないので話の種になるだろうと思ったのだ。

大理古城の南門から北門へと伸びるメインストリートをたどり、第二招待所へ。フロントで尋ねると、あっさりと一〇元の四人部屋に入ることができた。部屋に入ると二〇才台の日本人の若者ばかり。話を聞いてみると、多くは一年ほどもかけて中国をまわるという者たちだ。久しぶりの日本人たちとの会話だったけれども、あまりなじめなくて僕は会話もそこそこにして夕食に出た。

第二招待所はバックパッカーたちの溜り場で、その付近には彼らを相手の店が並んでいた。英語の看板や英語のメニュー。中には日本語もあった。しかし外国人旅行者の溜り場ともいうべきこれらのレストランに入る気にはなれなくて、復興路と名付けられた通りを散歩がてらに歩いていった。

大理（大理古城）は一三世紀にモンゴル軍に制圧されるまでは南招大理王国の都だった。ほぼ正方形の古城を南北に縦断する通りが復興路であり、北門から南門までは二キロほど。集落は一部古城の外部にも広がっているが、大理の街はほとんど古城の中にあって、とてもコンパクトだ。第二招待所は復興路の中央あたりを少し西に入ったところにある。

夕暮れの復興路を北門の方へ歩いていった。四角いビル風の建物は街の中心部に数えるほどしかなくて、復興路の両側には黒い瓦屋根の二階建ての建物が続いている。狭い大理の街には必要がないのか、自動車は見かけない。その代りに馬車が軽やかな鈴の音をたてて通り過ぎていく。通りの所々には今を盛りの西瓜が山と積まれていた。その名のとおり瓜を大きくしたような細長の西瓜。

北門に上って、煙草を一服。城門はそびえ立つほど大きなものではなく、また特にカを入れて整備されているというわけでもないが、立派なものだ。北門からさらに北へと伸びる田舎道を眺めながら、しばらくぼんやりしたあと、適当な食堂を捜しながら復興路を引き返した。

ひんやりとした土間には低い木製のテーブルがいくつかと椅子。先客はひと組だけ。しばらく待っていると、奥の調理場から女の主人が注文を

取りに来る。肉炒、鶏蛋炒と米飯、八・八元。
夕暮れの中を、南門の方へ散歩。裸電球の街灯。そして暮れ始めた夕闇に押し包まれたかのような中心街のささやかな雑踏。南門の方からは、おそらく農作業からの帰りだろう赤ん坊を背負った農夫が家族とともに歩いてくる。母親らしき農婦は農具を入れた竹カゴを背負っている。かたわらには夫婦の親だろう老人と子供たち。決して豊かには見えない農夫たちの仕事帰りの光景を目にして、僕はそこにひとつのユートピアを、自立と自足のユートピアのようなものを幻想して立ち止まる。

※

五月二九日（土）午前九時。荷物を第二招待所のフロントに預けてチェックアウト。ホテルの中庭を通り過ぎようとすると、ちょうど朝食を食べていた日本人のグループのひとりが、
「もう行くのですか？」
と声をかける。
「うん、ちょっと中和寺の方まで行こうと思って」
と僕はあいまいに答える。
長い旅に少し倦怠の雰囲気を漂わせた彼ら、旅先のホテルにものの見事に日本人社会を作り上げている彼ら、そしてひたすら漂い続けようとする僕の目には湯水のように時間を浪費しているように見える彼らをあとにしながら、僕はいったい何に急かされているのだろうか、と自問する。
確かに一昔前、僕にも彼らと同じように無目的な時間を湯水のように浪費していたときがあったように思う。目的はそのうちどこかからやって来るだろうと、あるいはこの無目的な時間こそが出来合いの目的ではなく本当の目的とでもいうものを生み出すのだという漠然とした期待や信念を抱きながら。そして確かに目的はやって来たし、生まれもしたのだと思う。そしておそらく目的は、そのあとで分解し、霧散してしまったのだ。今の僕は再びの無目的に浮かぶ自分というものを見出したのかもしれない。ひとつのサイクルを経て、再び彼らと同じような場所に来たのかもしれない。しかし今の僕には湯水のように使う時間というものがないような気がする。時間ははっきりと有限であり、使った分だけ減っていくものなのだ。
僕は三七才であり、彼らと同じほど若いときには分からなかった自分というものの有限性ということを少しは知っている。
一方で、僕はこの時間に対する感覚がおそらく僕の旅を限定するものだということも知っていた。だがもともと旅は虚空を漂う無限定なもの

ではありえない。つねになんらかの限定に突き当たらざるを得ないものだ。人が憧れるような無限定な、自由な旅というものは実は夢物語、テレビの中にしかないのかもしれない。限定というのはロマンの破れ目だ。そしておそらく僕は『旅』という言葉に、自閉したロマンではなく、むしろロマンの限界、その破れ目、そこに露出する現実とでもいうべきものを求めている。旅のロマンの破れ目からはなにが見えるだろうか。おそらくそれは僕が僕自身を現実として見ている僕自身のロマン（それはまた日本というロマンでもある）の破れ目でもあるのだ。

僕は大理の街の招待所で一夜をともにした若い日本人バックパッカーたちの姿に、親しみやまぶしさを感じる一方で、なにかひどい疎隔のようなものを感じながら、

「それじゃ」

と言って別れたのだった。

招待所を出ようとすると、門前に座り込んでいた靴修繕の男が何事か声をかけてきた。僕の足もとを指差しながらしきりに何事かを言い、こっちへ来いというしぐさをする。ふと足もとを点検してみると、少しだけスニーカーの縫い目がほころんでいるのだった。靴修繕の男の眼力には降参したけれども、ほころびはたいしたこともなかったので修繕の方は辞退した。

復興路から西の方に向かう路地を入っていく。路上の食べ物屋で朝食を買った。ねじり棒のような捧げ物を炭火で焼いた平たいパンのようなものでくるんだもの。味付けは砂糖。〇・七元。朝食代わりのおやつを食べながらしばらく歩くと、西の城門に至り、通りを横切るとそこからはすぐに田園地帯。行き交う人の姿もほとんどない石畳の田舎道だ。

大理の西方は蒼山という四〇〇〇メートル級の山脈になっていて、最寄りの中和峰の中腹には中和寺という寺がある。日本人の若者たちとの会話で、中和峰の山頂まで行ったとか行かなかったとかいうことが話題になって、山頂まで行くことは無理としても中和寺までは簡単に行けるということを聞いたので、そこを目指すことにしたのだった。

石畳の道をしばらく歩いていくと、大理三月街の会場がある。白族の祭典としての三月街は農暦の三月に行われ、交易や競馬、綱引き、ダンスなど多彩な催しで賑やかだということだが、今はただ空っぽの売店のような台が原っぱに並んでいるだけだ。

やがて道は小さな村の中を通った。煉瓦造りの農家にまじって、自然石を並べて組み立てた塀や建物があった。これまた自然石を敷き詰めた村の道を歩いていくと、放し飼いの鶏がときおり鳴き声を上げた。ひっそり

とした村を通り抜けると、あとは山道。

山道をしばらく登っていくと、やがて人民解放軍の施設に至る。運動場では解放軍の若い軍人たちがバスケットボールをしていた。兵舎などの施設を横目に見ながらなおも歩いていくとゲートがあり、そこから向こうは禁区になっていた。仕方がないので少し後戻りして、見晴らしの良い場所で休憩。

高台から見下ろすと、そのすぐ下から段々畑や水田がずっと大理の街のあたりまで広がっていた。所々には農夫たちが鍬や鋤を手にして働いている。畦道では子供たちが遊び、そのかたわらでは馬が藁を食べている。遠く街の響きが微かに聞こえてきた。響きの中に静かに佇立する三塔寺。すぐ足もとから立ち上る虫の声。軍人たちのバイクのエンジン音。洱海ははるか遠く、湖面は白く輝き、対岸の山並は靄にかすんでいる。空を一面に覆う雲は白く、畑からは藁を焼く煙が立ち上っていた。静けさの中に、ときおり鶏は時を告げる。

禁区を避けて道なき道をたどっていくと、山の斜面には墓地が広がっていた。おそらく土葬の墓地なのだろう、墓は横臥したような形でその前面は一様に前方、大理の方を向いている。墓の全面はセメントで整形され、特に前面はきれいに整えられて、そこに死者の名前と簡単な経歴が記されてある。新しい墓はそのようなのだけれども、古くなってくるとセメントは黒ずんできて、風雨に侵食され、ひび割れ、やがてはセメントも崩れてひび割れた赤煉瓦や赤土も剥き出しになり、そしてひと盛りの土に帰っていくのだ。様々な状態を見せる墓が、それこそ無数に山の斜面に集まっていた。

中和寺を目指していたことなどは忘れてしまって、僕は沈黙する墓のひとつひとつをたどっていった。

方士標烈士之墓。楊蕊仙同志之墓。李維南同志之墓。宇有紅烈士之墓。孫小春同志之墓。李河渠同志之墓。…。

一千の沈黙、と僕は思う。何かしらこののどかな風景の中に直立するものを僕は感じていた。それはやがてはひと盛りの土に帰っていくものだとしても、その風化のただ中においてさえ発信されるもの。例えば比較的新しい墓の前面にはこのように記されている。

汪水発烈士之墓

一九三四年十月生干貴州省遵義県河色公社、

一九五五年三月参加中国人民解放軍、歴任戦士、

正付班長、正付排長、政治指導員、協埋員、

付科長等職、一九五六年九月加入中国共産党、

一九七四年四月三十日因病不幸逝世、終年
四十歳。

そっけないほど公的な略歴の背後には決して平穏であったとは言い難い、むしろ血しぶくばかりに激動した中国の現代史がうずまき、その中を生き抜いたひとりの人間の生の切実さが張り詰めている。

無数の墓に取り囲まれて、思わず立ちすくんでしまったのは、おそらくこの切実性の故なのだ。墓石に刻まれた文字をたどりながら、思わず僕は襟を正す。それが切実さに対する礼儀だと感じたから。

僕は一昨年の初夏、沖縄を旅行したときのことを思い出す。思いがけずも初対面の友人、小林さんの親切で、彼のバイクに乗せてもらって一日目は島南部、二日目は中北部をまわることができたのだった。ひめゆりの塔、平和祈念資料館。さとうきび畑のざわめき。魂魄の塔。そして斎場御嶽（せーふぁーうたき）のそそり立つ岩と樹木の陰の祭壇。次の日は、曇天の下の嘉手納基地、読谷（よみたん）村のチビチリガマと破壊された平和の像。今帰仁（なきじん）城と山原（やんばる）の有機農場。名護の街にそびえる大きなガジュマル。降り始めた雨にざわつく金武（きん）湾とＣＴＳ（石油備蓄）基地。それからラブホテル兼用のようなコザの安宿。

最後の日、ひとりになった僕は豊見城（とみぐすく）公園の野戦病院の壕に入っていった。崖の中途のような入口まで階段を降りていくと、壕の内部は地肌が剥き出しで、太い鉄骨で補強してあるだけだった。沖縄戦の爆撃のために壕は途中から崩れて通行禁止になっていた。所々には従軍看護婦の女学生たちの手記が掲示されていた。公園のはずれに位置する壕の内部には僕ひとり。ひんやりとした空気を感じながら、乏しい蛍光灯の明かりを頼りにして女学生たちの手記を読んでいった。

小林さんに案内されて訪れた至る所で感じた沈黙のようなものが、豊見城の壕に凝集されていたように感じたのだった。それは祈りのようでもあれば、告発のようでもあった。人気のない壕の内部に凝集した沈黙は、僕にとっては何か空恐ろしいもののようでもあり、不気味なもののようでもあって、僕はひたすらそれに耐えるようにして手記を読んだ。

その数日間、沖縄のそこここで感じた沈黙というものが僕自身に向けられたものであったかのように感じたのは、その沈黙にはどうしようもなく日本というものが絡みついているからに他ならないのだけれども、今でもそれを僕は梅雨入り間近い亜熱帯の曇天とともに思い出すのだ。

ふと我に帰ると、大理の墓地のただ中だ。眼下にはのどかな田園風景が

広がっている。空には白い雲が立ちこめているが、曇天という感じではない。立ちこめた雲間に光は乱反射し、空いちめんを光に包んでいるかのようだ。つかの間緊張し、凝集し、屹立した沈黙はほどけて、大理の山村風景の中に溶け入ってしまったかのようだって。そのように記憶というものはいつか風化し、風景の中へと拡散してしまうものなのかもしれない。いつか風景の裂け目から再び沈黙として噴出するときまで。

墓地の広がる山の斜面を降りて、田圃や畑の畦道をたどった。農作業に忙しい農夫たちの脇を通り、畦道からさっき通り抜けた村に入って、そのまま大理古城へ。

大理博物館付近に店を出していた屋台で昼食に米線。ぽつりぽつりと降り始めた雨を避けて、付近の建物の軒先で食べた。雨はすぐに上がったので、復興路を南門の方に向かって歩いた。南門の付近には大理石の品や藍染めの品などのお土産物屋が並んでいる。それに回教徒の清真食堂も目につく。店先に何か大理石のプレートを並べている店があった。数十センチから一メートル近い高さのプレート。何かの飾りものだろうかと考えながら見ていると、ふと思いつく。それは墓の前面に据えるプレートなのだ。

南門の付近では、急に白族の売り子たちの声がうるさくなる。最初は腕輪や指輪などのアクセサリーや偽コイン、それからチェンジマネー。

「不換、不換」

と言いながら歩き続けていると、レートが一六〇元から一七〇元に上がった。

南門前の広場には観光バスが停車し、昨日は僕もその一員だったグループと同じような観光団体が吐き出されてくる。白族の女たちは客をつかまえようとして観光客の方へと走り去っていった。

夕方六時半発の夜行バスまではまだかなりの時間があったけれども、何もすることがなくなってしまって、僕は少し眠たくなってしまった。南門の脇に小さな公園があったので入っていった。中に小さな汚い池のある公園で、所々にあるベンチは学生らしき若い人たちが占領して、一心に勉強していた。なるほど汚いけれども静かな公園は勉強には適しているかもしれないが、公園にいる皆がみな勉強しているという図はどう考えても不思議で、僕はぽっかりとエアーポケットにでも落ち込んだような気がする。折りも折り、またしても雨が降り始めた。適当な雨宿りの場所がなかったので、傘をさして公園内の廃屋の脇に腰を下ろして休憩した。

古城南辺に沿って南水庫まで歩いた。大理古城の中には東北と東南のすみに二つの池がある。南水庫はその東南の方の池。南門を離れると古城は風化してただの土手になっている。ひっそりとした田舎道をしばらく

歩いて、土手を登っていくと視界が開けて、大きな池が広がっていた。岸辺には芝生が植えられていて、何人かが釣りをしていた。土手は昼寝をするには絶好の場所だったけれども、さて寝ようかと適当な場所を物色すると、犬の糞があちこちに転がっていたり、ついさっき降った雨で濡れていて、なかなか適当な場所がない。それでもなんとか良い場所を見つけて、しばらく眠った。

浅い眠りの周辺を子供たちの声が通り過ぎる。ある子供は僕の顔を覗き込んで何やら笑い声を上げる気配さえする。目覚めると、学校帰りの子供たちだった。笑いながら、子供たちは土手を走り去っていった。

しばらくぼんやりとしたあと、再び土手を歩き始めた。土手の外側（西側）には米蔵のような立派な建物が並んでいた。大理古城を東西に横切る人民路を復興路の方に向かって歩いた。復興路以外は田舎街の路地とでもいったたたずまいだ。小さな駄菓子屋をひやかしながら、学校帰りの子供たちが路地を駆けていく。日用雑貨の店。散髪屋。申し訳ばかりの本を並べた本屋。けだるいほどにゆったりとした大理の街の午後。

午後五時過ぎに第二招待所から荷物を受け出して、大理博物館前のバス乗り場へ向かった。夕方近くに屋台のホットケーキのようなものを食べたのだけれども、少し腹が減ってきたので路上の物売りから肉まんを買った。大きなせいろから女が取り出した物は少し大きめの物だったけれども、さてバス乗り場の広場で食べようとすると、それは肉まんではなくて中身のない饅頭なのだった。一夜のバス旅行のために買い込んだミネラルウォーターを飲みながら、味のない饅頭を仕方なく食べた。

夜行の寝台バスは三〇人乗りくらいだろうか．進行方向を頭にした二段ベッドが三列並んだ溝造になっていた。大理からの同乗は香港人の若者たちのグループだけ。少しわがもの顔の態度を見せていたが、別に迷惑というほどのものではない。僕のベッドは真中最前列の上段。バスはしばらく走って下関で乗客を乗せて満員になり、昆明日指してひた走った。

山道のカーブは激しくてベッドに横たわった体は右に左にと揺られて、果たして眠れるだろうかと心配したのだけれども、そのうちにあっけなく僕は眠りに落ちた。

深夜、降りしきる雨の中に停車したバスに官憲が乗り込んできた。寝ぼけ眼で見ていると、乗客のうち何人かの身分証と荷物を点検したあと降りていった。

そのままた眠りに落ちて、ふと静けさに目覚めるとバスは停車し、動き始める気配がない。しばらく様子をうかがっていると、パンクなのだった。暗闇の中に降りしきる雨に濡れながら、懐中電灯の明かりを頼りにし

て運転手と車掌はタイヤ交換の作業をしていた。
再び眠り、ふと目覚めるとトイレ休憩。折よく催してきたところだったので、バスを降りた。降りしきる雨に打たれて、とほうもない闇がざわついているようだった。雨に打たれながら適当な所で立ち小便。バスに戻ろうとすると、目前で乗車口が閉じた。あわてて扉をノックして乗車。危うく置いて行かれるところだった。
再び目覚めたときは、あいかわらず雨は降り続いていたけれども、すでに朝の明るさの中で昆明は間近だった。気の早い乗客はすでに到着の準備を始めていた。
バスは五月三〇日（日）午前九時頃、バスターミナル到着。雨が降りしきっていた。その一夜はとても不思議な感覚を僕に与えた。まるで大理というエアーポケットのような異郷から不思議な旅を経て昆明という都会に戻ってきたという気がしたのだった。